

食品汚染を減らして実証
極微量放射能の危険

減った！子どもの病気



3.11から10年
見逃した福島

NPO法人 食品と暮らしの安全基金
(旧称 日本子孫基金)



まえがき

チェルノブイリ原発事故から間もなく35年、福島第一原発事故から10年を迎えます。

2012年から通っているウクライナで、5000人以上を健康にし、「日本プロジェクト」と呼ばれるようになった調査は、日本ではまったく報道されていません。

しかし、放射能で健康を損ねている人が300万人いるといわれるチェルノブイリの汚染地では、「希望が出てきた」と、高い評価を受けています。

これまでは「痛み」の調査結果を報告してきましたが、子どもの病気が減ったデータが出てきたので、ご報告します。

放射能の摂取量を減らす「人体実験」で得たデータは、人類の宝物といえます。

治して確かめる調査でわかったのは、低レベルの食品汚染が慢性病の原因になっていたこと。ウクライナと日本の食品基準は現行の100分の1、国際基準は1000分の1に引き下げないと安全を確保できないことが実証されました。

原発事故後から甲状腺ガンの検査を続けている寺澤政彦医師から、チェルノブイリの甲状腺ガン調査結果に基づいた福島の甲状腺ガンの今後の見通しも報告していただきました。

他には出ていない情報をお届けします。

2021年2月

NPO法人 食品と暮らしの安全基金(日本子孫基金) 代表
国際チェルノブイリ福島連盟 副会長 小若 順一



これから増える甲状腺ガン

3.11以降、子どもたちへの被曝の影響を注視し
ご自身でも甲状腺検査を実施してきた寺澤政彦医師に、
震災から10年経った子どもたちの様子を伺いました。



寺澤政彦 医学博士
てらさわ小児科(仙台)
院長

1984年から東北大学抗
酸菌病研究所(現・東北
大学加齢医学研究所)
で小児ガンの治療にかかわる。
1990年、小児科医院開業
☆甲状腺検診を山形「至誠堂総合病院附属
中山診療所」、「てらさわ小児科」で3カ月
に1回実施。また、「日本キリスト教団東北
教区 放射能問題支援対策室いずみ(仙台
市)」では、3人の医師で甲状腺検診を行っ
ている。

発表は252人だが、もっと多い

——10年たって子どもの甲状腺ガン発生はどのよ
うな状況ですか。

寺澤 非常に心配な事態になっています。
甲状腺ガンが増え続けているからです。

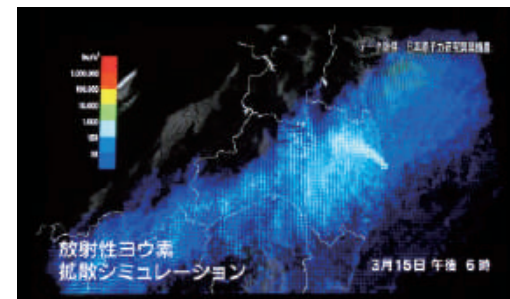
福島県「県民健康調査」検討委員会の1月
15日の発表によると、「悪性ないし悪性疑い」、
つまり、甲状腺ガンまたはその疑いがあると
判定された患者数は、252人に達しました。

予後のよい「乳頭ガン」が大部分ですが、予
後が悪い「未分化ガン」も発見されています。

この252人には、病院で経過観察中に見つ
かった例は含まれていないので、実際はもっ
と多いのです。

4回目の検査(実施年度は平成30年度～
令和元年度)で、3.11当時0歳、2歳だった
子どもにガンが見つかりました。約9年の潜伏
期を経ての発症です。

今後、10代の甲状腺ガン増加が心配なので



原発事故後の放射性ヨウ素の拡散シミュレーション
(2014年12月21日のNHKスペシャル「知られざる大量
放出」より)

すが、それを裏付けるような事例がすでに上
がってきています。

現在、県による検査は5回目の途中です。
昨年からは始まっていますが、新型コロナ感染
症のため、従来は2年間のところ今回は3年
間にわたって実施される予定です。

昨年6月30日時点で564人しか検査してい
ないのに、1人がガンの可能性がより高いB
判定となりました。B判定は、先行検査(1回
目)から4回目まで0.7%~0.8%で推移して
います。564人中1人だと2.4%になるわけ
で、今後の検査の結果が心配です。

ちなみに、判定の基準は
A1判定：結節やのう胞を認めなかった場合
A2判定：5.0mm以下の結節や20.0mm以下の
のう胞を認めた場合
B判定：5.1mm以上の結節や20.1mm以上の
のう胞を認めた場合
となっています。

のう胞とは、液体が溜まっている状態で、ガンに至るのは稀です。それに対し、結節とは腫瘍のこと。良性の場合もありますが、悪性なら、いわゆるガンです。

仙台市で私も含め3人の医師で甲状腺検診を行っている「放射能問題支援対策室いずみ」でも、昨年、1人の子に6mmの結節が見つかりました。

大きさはあまり問題になるほどではありませんが、2年前はA1判定だった子です。

お母さんはひどく動揺していましたが、当然です。待機していたカウンセラーに対応してもらいました。

——その子は福島出身の方ですか？

寺澤 宮城県県南の方です。県南地域は仙台と比べてのう胞、結節が発見される割合が高い印象です。福島に近いので、被曝量が多いからかもしれません。

福島県を離れても検査を

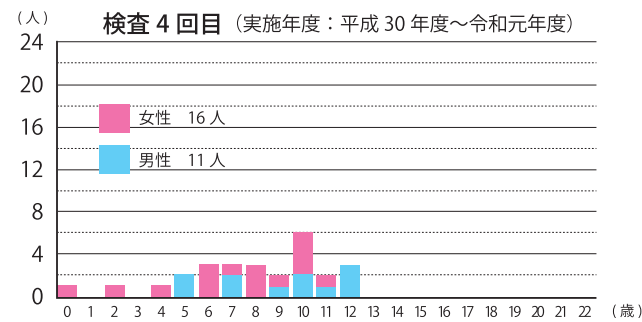
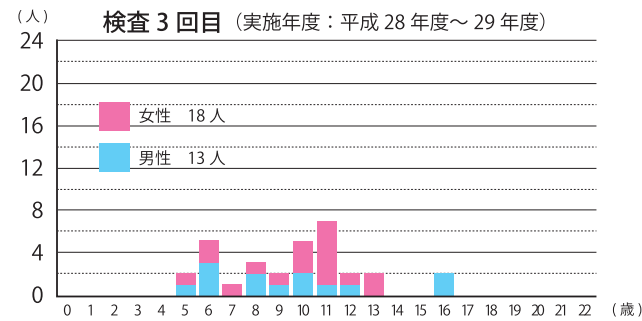
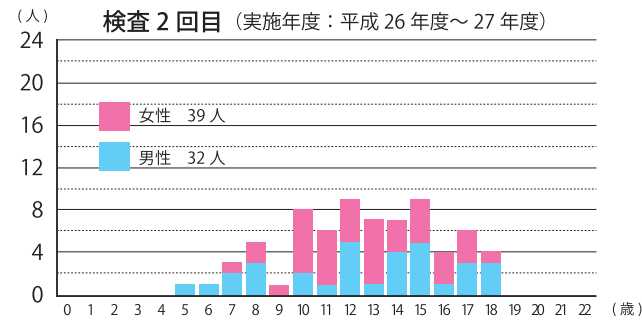
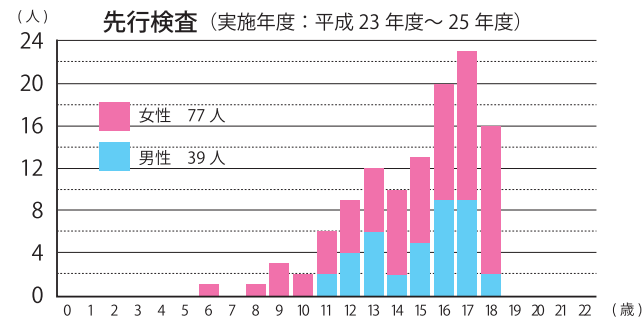
寺澤 2011年から10年たって、当時18歳の子は28歳になっています。

福島県の甲状腺ガン検査では、「25歳時の節目の検査」が、被曝当時18歳の子が25歳になった平成29年度(2017年度)から始まっていて、B判定は4.7%です。1～4回目までの検査では0.7～0.8%でしたから、6倍も高い割合です。この検査による「悪性ないし、悪性疑い」は、252人に含まれていますが7人です。

——2016年度まで、25歳時の検査は行われていなかったのですか？

寺澤 行われていません。2011年から25歳の検診が行われていれば、傾向を追えたのに、残念です。

「悪性ないし悪性疑い」だった年齢・性別
(年齢は2011年3月11日現在)
「第40回「県民健康調査」検討委員会」資料より



25歳時の節目の検査 (実施年度：平成29年度～)
女性5人、男性2人 (3.11当時16～18歳)

宮城県のガン登録(2014年)を見ると、30歳未満の女性のガン罹患数の1位が白血病で、2位が甲状腺ガンです。

30～39歳では、女性は乳ガン、子宮ガンに次いで3位。男性でも大腸ガン、悪性リンパ腫に次いで甲状腺ガンは3位となっています。

今となっては、年齢のせい、被曝のためか、原因はわかりにくくなってしまいましたが、大人になると甲状腺ガンが出やすくなるので、A2判定、B判定は、毎回、じわじわと増えていくと予想されます。

一方、他県に移り住む人も増えています。福島での検査でA1判定、大丈夫と言われた方でも、転居後、必ず検査を受け続けるようにしてください。

福島県外でも、県が委託している病院で甲状腺検査ができます。「福島県放射線医学県民健康管理センター 県民健康調査」で検索して「甲状腺検査」を選択すれば、県外に住んでいる方への案内があります。

「3・11甲状腺がん子ども基金」で療養費の給付を受けた人は福島県105人に対して、他県は56人です(2020年3月現在)。甲状腺ガンの問題は福島県だけでなく東北・関東・甲信越にまで広がりのある問題なのです。

——子どもに結節が増えているのですから、同じような生活をしてきた家族も被曝している可能性がありますね。

寺澤 私たちの検診では家族も診ています。子どもの検査は受けながら、なかなか自分のことは言えないようですが、お母さんの方が深刻な例もあります。

お母さんが甲状腺ガンになっていて子どものことが心配という家庭もあります。お父さん、お母さんの健康も考えて、ぜひ受けてほしいですね。

男児にも甲状腺ガンが多い

寺澤 小児の甲状腺ガンは、かつては、小児科医が一生で1人か2人診るか診ないか、日常診療で経験することのほとんどない、稀な病気でした。成人の甲状腺ガンとは事情が全く違います。

甲状腺関連の病気は、平時では女兒に圧倒的に多いのですが、福島県では男児にも多い。これまでに発見された252人の男女比は、97：155です。総数だけでなく、男児数の多さも気になります。

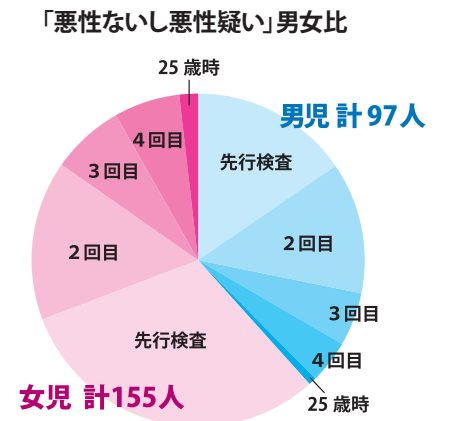
国は、10年たったから検査を止めようと言っています。メリットがないと言うのですが、転移したガンが何例も発見されており、再発例もあります。

10年経ち、患者はさらに増えてくると思われます。検査の中止など、とんでもないことです。

——ウクライナでは35年経った今でも検査を続けています。福島県の見解は？

寺澤 福島医大と親は検査の中止に反対していますが、県は粛々と検査を続けています。被曝との関係を否定も肯定もしません。しかし、2年間で、異常がないA1から、経過観察が必要なBになる例が報告されている現状では、A1だから安心とは言えません。

だから、子どもたちがエコー検査を毎年受けられる体制を整える必要があります。



内部被曝で筋肉、神経、脳にダメージ

「痛み」が出ていた

「みんな病気よ!」と、モジャリ村学校で言われ、汚染地の子の「痛み」を治して、元気にしていたら、いつしか「日本プロジェクト」と呼ばれるようになり、感謝されているのが、私たちのウクライナ調査です。



12の学校で、子どもが感じている「痛み」を調べながら、食品の放射能汚染を減らして、どれくらいの食品汚染レベルなら、「痛み」が出なくなるかを繰り返し調査しました。

その結果、食品の安全性評価に、内部被曝による筋肉、神経、脳へのダメージを加えて、放射能汚染の国際基準を現行の1000分の1以下に引き下げなければ、人々の健康が守れないことが判明しました。



専門家も知らなかった放射能の危険性を、私たちが明らかにできたのには、次のような経緯がありました。

福島原発が爆発事故を起こしたとき、放射能が危険なことは、誰でも知っていました。外部被曝の危険性はX線検査でよくわかっており、チェルノブイリ原発事故で、ヨウ素131によって甲状腺ガンが発生していたこともわかっていました。

ところが、それ以外の危険性はほとんど知られていなかったのです。

「食品と暮らしの安全基金」はもともと、化学物質による遺伝毒性から子孫を守ろうと「日本子孫基金」という名前で1984年に結成した団体です。ですから、福島原発事故が起きたときも、放射能による遺伝毒性を真っ先に懸念しました。そして、その先例を

調べるため、1986年のチェルノブイリ原発事故で多くの住民が被曝したウクライナに向かうことにしたのです。

ちょうどチェルノブイリ事故のときに胎児だった女性が、子どもを産み始め、孫への遺伝的な被害が出ているかどうかを調査できる時期になっていたので、2012年2月からウクライナに通い始めました。

「遺伝」から「痛み」の調査に

第2回調査を行っていた2012年5月29日、首都キエフから50kmほど南にある非汚染地域の村で、汚染地から移住してきた住民に聞き取り調査をしていると、4歳の女の子が「膝の下が痛い」と言うので、何かおかしいと思いました。

その後、汚染地域に行き、6月1日、原発から約125km西にあるモジャリ村学校の前を通ると、校庭に先生と生徒がいたので、突撃取材。



「子どもは元気ですか」と聞くと「みんな病気よ!」と副校長。

子どもたちを20人ほど集めてくれたので、「足が痛い子?」と質問すると、約半数が手を上げました。続けて「腕が痛い子?」「頭が痛い子?」と質問すると、やはり半数ぐらいが手を上げました。

村のあちこちを回り、20カ所の地面に測定器を置いて線量を調べると、平均0.115マイクロシーベルト/時という値が出ました。年間だと1ミリシーベルトになります。

国際基準は、自然界や医療での被曝を除いて年間1ミリシーベルトですから、この村は安全なはず。それなのに、「みんな病気よ」と言われたので、この日から遺伝の調査をやめ、「痛み」の調査に切り替えました。

1ヵ月半で痛みが減り始めた



帰国後、通訳のヴァレンティーナさんから、モジャリ村から10kmほど西にあるビグニ村に住み、原発事故の年に生まれた26歳の女性を保養に行かせたいと連絡が入りました。



「全身に痛みがあり、生きるのが非常に辛そうだ」というので、汚染されていない南部の保養地で70日間、過ごしてもらうことにしました。

第3回調査は2012年9月からで、体のどこかに慢性的な痛みのある子の割合を学校に行き行って調べると、全学年で痛みのある子が異常に多いことを確認できました。

その夜、70日間の保養から帰ってきたナタリアさんがホテルに現れ、満面の笑顔で「ほら、どこも痛くないのよ」と言うので、びっくりしました。

「46日を過ぎたころから痛みが減り始めた」と、回復の様子を詳細に語った後、「来年、キエフの恋人と結婚する」と言ったので、調査の参加者からカンパを集め、「ビグニ村には戻らず、このままキエフに住みなさい」と、ご祝儀の金一封を渡しました。

汚染の少ない食品で実験

放射能汚染の少ない食品を食べるだけで、痛みがなくなるかどうかを調べてほしいと、現地コーディネータのタチアナさんに依頼して帰国。

非汚染地のコヴァリン村で、体調の悪い9家族が汚染の少ない食品を11月から食べ始めて間もなく、「子どもの痛みが少なくなり、体調がよくなった」と連絡が入りました。

そこで、12月から汚染地のビグニ村の家族にも、汚染を減らした食品を食べてもらうことにしました。

1.1ベクレル/kgの食事で痛み

第4回調査は2013年3月から。汚染がどこまで少ないと痛みのある子がいなくなるか調べるため、キエフから約400km東南東のハリコフ市を訪問。どの学校でも、子どもたちの



大声が聞こえ、元気なことがすぐわかりました。痛みが慢性的にある子は皆無でした。

ところが、キエフから150kmほどのノヴィ・マルチノヴィッチ村学校まで戻り、高学年の子どもと親に調査すると、足痛は1人でしたが、「頭痛がする？」の質問には、7割以上が手を上げました。

この村の標準的な1日の食事を作ってもらい放射能を測ると、1.1ベクレル/kgとなり、1日に2.36ベクレルのセシウム137を摂取していることが判明しました。

治して検証

ここから、食品汚染が原因ではないかとの仮説を、大規模な人体実験をして、治して検証する段階に入りました。

2013年5月、村人の家の自家畑にカリウム肥料を撒いて作物のセシウム汚染を減らし、痛みが減るかどうかが、調査を始めました。

カリウム肥料は学校にまとめて渡し、各家庭に分配してもらいました。

秋に収穫した作物は汚染が少なくなって

いるはずなので、2014年3月に、学校を回って調査。すると、痛みを感じる子が減って、子どもたちは元気になっていました。

ノヴィ・マルチノヴィッチ村でも、食事の放射能汚染を減らしたら、頭痛が消え、さらに慢性病の人が減りました。この実験により、食品汚染を1.1ベクレル/kg未満にすれば、内部被曝で人体に痛みが出なくなることが確認できました。

汚染地の調査には、農業放射線研究所・副所長のニコライ・ラーザレフ博士が同行してくれました。これ以降、博士は私たちの重要なパートナーになりました。



博士が、日本プロジェクトに参加している学校の村の様々な食品を、1ベクレル/kg以下まで調べてくれているので、食品の放射能汚染を減らすと、痛みがなくなり、健康状態が良くなり、病気も治っていくことが、豊富な科学的データによって確認されています。

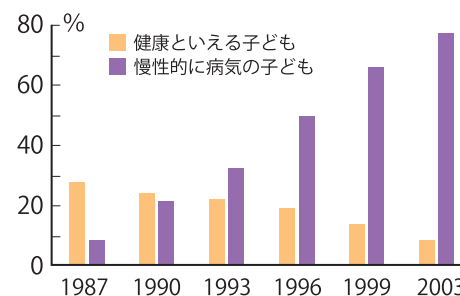
「痛み」の調査が行われていない

2012年9月、原発事故から25年後にウクライナ政府が出した報告書『未来のための安全』をNHKが特集番組で紹介しました。

痛みの調査 ビグニ村学校

(人数)

	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年
調査人数			130人	130人	120人	130人	135人	137人
足痛			95	76	62	55	45	38
頭痛			110	95	80	72	55	48
のど痛			75	72	64	58	49	35



汚染地では健康な子どもが減り続けて、2008年には6%しかいなくなり、慢性疾患のある子が78%になっているという衝撃の内容です。

2013年には『チェルノブイリ被害の全貌』の日本語訳が出版されました。

これらの調査報告には、慢性病が増えているデータは載っていますが、「痛み」は出てきません。

ラーザレフ博士も「痛みの調査はこれまで行われていない」と言います。

私もキノコで「痛み」を体験

「痛み」を調査した私(小若)も、実は「痛み」を体験しています。

第3回調査のとき、汚染地で1度、キノコを食べました。その3ヵ月後から、足に痛みが出ました。4歳の女の子が指さしたのと同じ、膝の下が痛くなったのです。

それから、趣味のジョギングをしようとすると、100m走っただけで足の筋肉全体が痛くなり、まったく走れなくなりました。

5ヵ月後にはギックリ腰で動けなくなりました。

それから数ヵ月後に痛みは軽くなりましたが、違和感がなくなったのは4年後です。

このとき汚染地でキノコを食べたのは5人。1度食べたただけなのに、数ヵ月後から全員に痛みが出たり、指が曲がらなくなった

りする異常が出ました。年齢が高いほど、遅れて症状が出るのが特徴で、生まれて初めての嫌な体調不良を体験しました。

「日本プロジェクト」6つの成果

「日本プロジェクト」は、次の6つの成果を上げたと考えています。

- ① 食品の放射能汚染を減らしたら、子どもを含めた村人の頭痛や足痛などが消えた。
- ② 汚染を減らした食品を食べ始めてから痛みが減り始めるまでの期間は、子どもは1ヵ月くらい。大人は少し遅い。
- ③ 痛みがなくなると、子どもは元気になり、それから病気が治り始める。
- ④ 頭痛、足痛などが起きていたのは、セシウム137による内部被曝が原因で、脳細胞、神経細胞、筋肉細胞が傷ついたからと考えられる。汚染地で多い慢性病は、内部被曝によって、神経や筋肉以外の臓器も含めて細胞が傷ついて起きている現象と考えられる。だから、痛みと病気は異なるが、食品汚染を減らすと、痛みも病気も減る。
- ⑤ 「シーベルト」で内部被曝の危険性を評価するのは間違いである。セシウム137が体内で核分裂すると、大きなエネルギーが発生する。このエネルギーで過酸化物が生成し、活性酸素が多くの細胞を破壊する。これを無視したシーベルト評価は、内部被曝の危険性評価に用いることはできない。
- ⑥ ウクライナも日本も国際基準も、シーベルトで危険性評価を行い、セシウム137の食品基準を定めている。

現在の基準では人の健康を守れないから、国際食品基準の1000ベクレル/kgを、1ベクレル/kgに引き下げる必要がある。

ナロジチ

「体内被曝」が減った

牛乳汚染がひどい地域

ラーザレフ博士の提案でナロジチ学校でも、子どもの健康を良くすることにしました。

ナロジチ市は、チェルノブイリ原発から70km西にあり、かつては強制移住区域でしたが、国の経済破綻で1万人近くが取り残され、ほぼ全員が慢性病にかかっています。

まずは土壌や食品の汚染を調査。

汚染度の高いイノシシ、キノコ、ベリーは食べないよう指示しましたが、1日に500mlも

品目	ベクレル/kg
土壌	1835
灰	3400
牛乳	219
ジャガイモ	8
人参	1.9
食用ビート	2.4
キャベツ	1.6
穀粒	6.3
肉(牛肉)	63
肉(猪)	40400
魚	18.2
野生ベリー	1000
キノコ(干し)	4683 Max-77000
蜂蜜	32

飲む牛乳を止めるのは無理。そこで汚染度を下げることになりました。

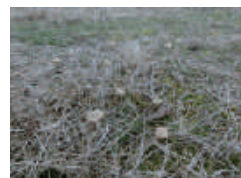
牛に穀物飼料を与える予備調査を2015年に実施すると、牛乳のセシウム137は1/3ほどに減り、その牛乳を飲む6家族全員の健康が改善されました。

全員が病院に通っていた

ナロジチ学校は生徒数が約400人。全員を支援対象にするには多過ぎるので、5年生だけ治す調査をすることにして、2015年11月末に訪問。

子どもたちは、体のあちこちが痛いと言い、「病院に通っている子？」と質問すると、全員が手を上げました。

牛の放牧場に行くと、小さなキノコが生えていたので、牛がキノコを食べなくなれば、安全な牛乳になると期待して、牧草地に化学肥料を撒き、牛に穀物を食べさせて牛乳汚染を減らす実験を2016年に行いました。



牛乳のセシウムが97%減

5年生は34人で、27人が家で牛を飼っていました。この27家庭の牛乳を毎月、検査すると、汚染がどんどん減っていきました。

2016年2月には1ℓ当たり220ベクレルだったのが、11月には6ベクレルに減ったので、97%減です。

大きく減った体内被曝

この地域では、体内セシウムの濃度を測定するホールボディカウンターによる検査が、年に1度以上、義務付けられています。

牛乳汚染が減り始めると、ナロジチ中央病院のマリア・パシュック院長が、年に何度も検査してくれました。

体内セシウム量の推移を図で見てください。

2014年、2015年、2016年4月までは、だいたい同じでしたが、8月には21ナノキュリーを超える子はいなくなり、2017年6月には11ナノキュリーを超える子がいなくなっています。

生徒の内部被曝が劇的に低下すると、病欠日数は、2016年には、入学したときの半分に減りました。

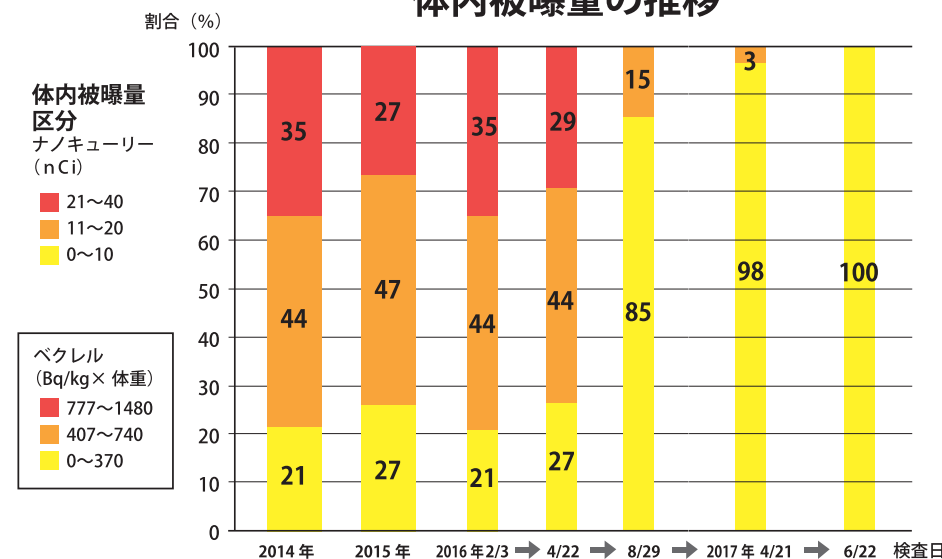
1学年上と1年下の子どもたちの病欠日数に変化はありません。

他の学年の子を健康にできなかったのは残念ですが、調査は大成功でした。

ウクライナを訪問するたびに、ナロジチに寄っていますが、いつも、この学年の子どもたちから大歓迎を受けています。



体内被曝量の推移



<ナロジチ学校34人>体内被曝量の検査結果

被曝量・人数	検査年月日	2014年	2015年	2016年2/3	2016年4/22	2016年8/29	2017年4/21	2017年6/22
21~40 nCi		12人 (35.3%)	9人 (26.5%)	12人 (35.3%)	10人 (29.4%)	0人 (0%)	0人 (0%)	0人 (0%)
11~20 nCi		15人 (44.1%)	16人 (47.1%)	15人 (44.1%)	15人 (44.1%)	5人 (14.7%)	1人 (3%)	0人 (0%)
0~10 nCi		7人 (20.6%)	9人 (26.5%)	7人 (20.6%)	9人 (26.5%)	29人 (85.3%)	33人 (98%)	34人 (100%)

27家族の牛乳のセシウム137検査結果 (2016年2月~11月)

	調査 / 月 (Bq/ℓ)									
	(開始)2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
平均値	220	117	65	32	30	29	34	15	8	6

カリウム肥料を配った汚染地

「病気」も減った

生徒の病気がどう減っているか知りたくて、「教師の会」に依頼し資料を作ったところ、年々、順調に減っていました。



「日本プロジェクト」は、「痛み」は調査しましたが、病気は調査していません。

生徒の病気は、医師の診断記録が学校にあります。そこから、呼吸器、消化器、心臓、血管、筋骨格などの病気を抜き出して年ごとにまとめた資料が、届きました。

そこに、カリウム肥料の投入量を重ね合わせると、カリウム肥料を配った全学校では、生徒の病気が年を追うごとに減っていました。

原発に一番近いラディンカ村学校

一番病気が減ったのは、原発から28kmしか離れていないラディンカ村学校です。

本来は強制移住区域にある村ですが、汚染度が比較的低く、豊かな集団農場を離れたくない住民が多かったため、有力者と交渉して強制移住対象から外してもらったと、2012年の調査のときに聞きました。

原発に一番近い村として海外でも知名度が高いため、2016年からイタリアの団体が、学校給食に、汚染されていない食肉と乳製品を提供していました。それもあって病気の子は減っていました。

しかし、そこから病気が半減したのは、大阪に本部のあるオルター（西川榮郎代表）が1万ドル（105万円）を寄付して、20トンのカリウム肥料を投入したからです。

ラーザレフ博士は、カリウム肥料が作物の汚染を減らすことは、原発事故後の調査でわ

かっていたと言います。

しかし、ウクライナは貧しい国なのでカリウム肥料を投入せず、汚染地に住む300万人のほとんどを病人にしまいました。

私たちは病気の原因を取り除き、ごく一部とはいえ、健康にしたのです。

劇的に減らない3つの理由

ただ、全般に病気の減り方は緩やかです。その理由は3つあると考えています。

まず、カリウム肥料の投入量が少ないこと。日本プロジェクトへの参加を望む自治体や学校はたくさんありますが、当初、調査させてもらった学校以外は断っています。

それでも12校になって、1家庭当たりの投入量が十分でなく、劇的な効果を上げられないでいます。

次は、シックハウス対策をしていないこと。ウクライナでは、学校でも個人の家でも、揮発性塗料のすさまじい臭いに出合うことがあります。塗料の成分で病気になっている生徒がいると考えられます。

第3は、野生のキノコを食べていること。頭痛があるという生徒に「キノコを食べた？」と聞くと、「食べた」と答えました。

一度食べただけでも、影響が数年残る体験を私自身がしています。食べてすぐではなく、1ヵ月以上たってから影響が出て、影響が長期間続くのが、内部被曝の怖いところ。

病気の生徒の推移

①ビグニ村学校

	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年
総生徒数			156人	164人	165人	170人	173人	174人
呼吸器疾患					30人	25人	15人	5人
消化器疾患					100人	90人	45人	7人
心臓血管系疾患					15人	10人	6人	4人
筋骨格系疾患					65人	50人	25人	15人
内分泌系疾患					30人	23人	16人	9人
神経系疾患					24人	21人	17人	10人
化学肥料投入量			2t	3t	9.5t	7.5t	2.8t	7t

②モジャリ村学校

	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年
総生徒数	94人	85人	74人	68人	70人	72人	75人	70人
呼吸器疾患	44人	40人	38人	36人	33人	32人	27人	19人
消化器疾患	23人	21人	20人	19人	17人	13人	9人	7人
心臓血管系疾患	5人	4人	4人	5人	5人	5人	3人	2人
筋骨格系疾患	1人	1人	1人	—	1人	1人	1人	1人
内分泌系疾患	9人	7人	6人	4人	5人	5人	2人	2人
化学肥料投入量	0	8t	3.5t	3.4t	5t	4t	1.8t	3t

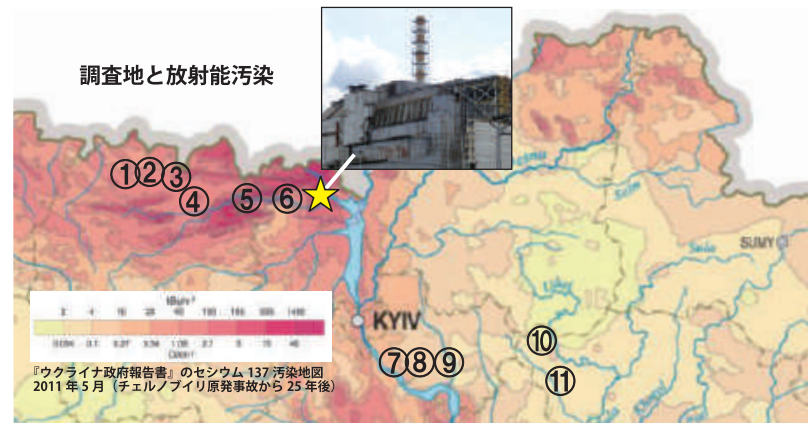
③ピシャニッツア村学校

	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年
総生徒数	98人	92人	87人	82人	89人	91人	95人	74人
呼吸器疾患	17人	11人	15人	10人	8人	12人	8人	8人
消化器疾患	6人	6人	6人	2人	2人	2人	1人	1人
心臓血管系疾患	76人	70人	50人	44人	39人	41人	40人	40人
筋骨格系疾患	11人	20人	24人	18人	13人	10人	10人	10人
内分泌系疾患	4人	2人	4人	4人	4人	4人	4人	3人
視覚障害疾患	7人	5人	5人	4人	3人	2人	3人	3人
化学肥料投入量	0	8t	4t	3.2t	4.5t	5t	1.8t	4t

④オブルチ市学校

	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年
総生徒数								
呼吸器疾患						10人	8人	5人
消化器疾患						35人	27人	12人
心臓血管系疾患						47人	35人	16人
筋骨格系疾患						46人	39人	37人
神経系疾患						42人	24人	3人
内分泌系疾患						15人	16人	13人
化学肥料投入量							4.5t	8.1t

※「未来を安全にする教師の会」日本プロジェクトに参加する学校の教師を中心に2015年11月に設立。



⑤ナロジチ学校

	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年
(学年)					(5学年)	(6学年)	(7学年)	(8学年)
呼吸器疾患					29人	26人	19人	15人
消化器疾患					31人	23人	18人	11人
心臓血管系疾患					12人	8人	6人	3人
筋骨格系疾患					19人	15人	11人	7人
神経系疾患					29人	24人	17人	10人
視覚障害疾患					20人	17人	15人	12人
化学肥料投入量					2.5 t	2.5 t		

⑥ラディンカ村学校

	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年
総生徒数	104人	107人	115人	110人	113人	110人	111人
呼吸器疾患					17人	9人	4人
消化器疾患					98人	15人	8人
心臓血管系疾患					33人	12人	7人
筋骨格系疾患					88人	18人	21人
神経系疾患					76人	24人	7人
内分泌系疾患					12人	17人	3人
化学肥料投入量		8 t (10月, 村)		4.8 t	5 t	?	20 t (オルター)
イタリヤの団体から				肉と乳製品	肉と乳製品	肉と乳製品	肉と乳製品

⑦コヴァリン村学校

	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年
総生徒数								
呼吸器疾患						5人	2人	1人
消化器疾患						25人	19人	10人
心臓血管系疾患						7人	5人	1人
筋骨格系疾患						12人	8人	4人
神経系疾患						2人	—	—
内分泌系疾患						11人	7人	2人
化学肥料投入量		1.5 t	8 t	1 t	4.5 t	1 t		

⑧デビチキ村学校

	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年
総生徒数								
呼吸器疾患						4人	—	1人
消化器疾患						11人	—	2人
心臓血管系疾患						10人	15人	15人
筋骨格系疾患						19人	23人	20人
神経系疾患						6人	6人	5人
内分泌系疾患						1人	3人	1人
化学肥料投入量								

⑨ストヴピャギ村学校

	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年
総生徒数		101人	102人	108人				
呼吸器疾患		6人	7人	6人	3人	3人	1人	1人
消化器疾患		12人	12人	8人	7人	5人	1人	1人
心臓血管系疾患		4人	4人	3人	3人	2人	2人	2人
筋骨格系疾患		19人	18人	18人	14人	13人	13人	11人
内分泌系疾患		3人	1人	—	2人	1人	—	—
神経系疾患		2人	2人	1人	—	1人	1人	—
化学肥料投入量			4 t	4 t	5.5 t	2.5 t		

⑩ノヴィ・マルティノヴィツ村学校

	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年
総生徒数		158人	119人	130人				
呼吸器疾患						47人	39人	28人
消化器疾患						86人	71人	59人
心臓血管系疾患						24人	20人	15人
筋骨格系疾患						22人	16人	11人
神経系疾患						29人	21人	13人
内分泌系疾患						11人	9人	8人
化学肥料投入量		2.5 t	3 t	3 t	3.8 t	2 t		

⑪オブシュキ村学校

	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年
総生徒数								
呼吸器疾患						5人	1人	—
消化器疾患						3人	1人	—
心臓血管系疾患						4人	3人	3人
筋骨格系疾患						3人	3人	2人
視覚障害疾患						10人	7人	6人
神経系疾患						1人	1人	1人
化学肥料投入量			3 t	3 t	3.8 t	2 t		

安全になった農作物



日本はカリウム入り化学肥料を大量に田畑に入れたので、大半の農作物は安全になりました。でも、危険な農作物も依然あるので、注意しましょう。

カリウム肥料を畑に入れると放射能汚染が減ることを本誌が最初に報じたのは、3月11日の直後、物理学者の樋田敦先生にインタビューした記事で、4月25日に発送した2011年5月号です。

本誌が一番乗りと思っていたら、日本の農業専門家も負けてはいませんでした。

2011年4月26日に福島県が出した『農業技術情報』（第4号）に「カリウム施肥は、セシウム吸収抑制に効果的」として、過剰施肥に注意しながら「標準施肥量を用いよう」と書いていたのです。

しかし、福島県の問題はここからです。

緊急事態なのに、大バカ者の官僚が、放射性セシウムが土壌から作物に移行するのをカリ肥料で防ぐ実験を行わせたため、補助事業が遅れて、本格的にカリウム肥料を田畑に入れ始めたのは2013年1月15日です。

安全基金がカリウム肥料を買ったのは、2013年3月のウクライナ調査の最中です。福島県より2ヵ月遅かったとはいえ、その

後、めざましい成果を挙げ、学校の生徒や村人を健康にしたとして、現地での評価はどんどん高くなっていきました。

心臓病で死ぬ人が増加

福島県では、原発事故が起きた2011年に心臓病で亡くなった人は、前年より500人ぐらい多くなりました。

「心疾患」で亡くなる人は、2010年までは人口10万人当たり180人から200人弱でしたが、2011年は226人に急増したのです。

放射能の核分裂によって心臓の細胞が傷ついて、突然死しやすくなる、というわかりやすい原理があり、実際に心臓病にかかる人が増え、心疾患で亡くなる人が増えたのです。

それなのに福島県は、原発事故の影響を否定しました。

それどころか、「食べて応援しよう」と、国や産業界と一緒にあって、国民を殺しながら福島と農業を守る活動を行いました。

2011年の夏以降、福島県では約100万人の県民が、放射能による内部被曝で、疲れやすくなったり、あちこちが痛くなったりしていたはずですが。

第2表 主な死因の死亡数・死亡率・対前年比較

死 因	平成23年			平成22年		
	死亡者数	死亡率 人口10万対	死亡者 総数に 占める割 合(%)	死亡者数	死亡率 人口 10万対	死亡者 総数に 占める割 合(%)
全 死 因	26,106	1,317.8	100.0	22,747	1,126.3	100.0
悪 性 新 生 物	6,192	312.6	23.7	6,173	305.7	27.1
心 疾 患	4,473	225.8	17.1	3,994	197.8	17.5
脳 血 管 疾 患	2,780	140.3	10.6	2,766	137.0	12.2

それを、避難生活や緊急事態の疲れと医師が診断し、官僚らは放射能による食品汚染を容認しました。

現行の食品基準も、本誌の調べてわかった本当に安全なレベルより100倍も緩いのに、国はそれを検証しようとせず、欠陥基準で安全性を判断しています。

100ベクレル/kgは危険

2014年から福島県の栽培作物は、汚染がどんどん減っていきました。ところが、福島県で「心疾患」で亡くなる人は、2012年以降も増えたままです。

汚染が減っているのに、汚染が原因と思われる疾患で亡くなる人が多いのは、本当に安全なレベルにまで汚染が減っていないためと考えられます。

行政で放射能を検査している部門の人に聞くと「すべての食品が基準以下なので安全です」と言います。

しかし、国の安全基準は100ベクレル/kgです。こんな食品を食べていたら、2ヵ月後には全員が病気になり、重症患者もどんどん増えていきます。

「不検出」は「安全」でない

食品の放射能汚染が大幅に減っていることは事実ですが、一般的な検査は検出限界が7~8ベクレル/kgなので、「不検出だから安全」とは言えません。

1.1ベクレル/kgの食事で頭痛が出ることをウクライナで見つけているので、検出限界を1ベクレル/kg未満まで下げて調べないと、本当に安全とは言えません。

この点を踏まえ、東日本の各地から農作物や海産物を集め、検出限界を1ベクレル/kg未満まで引き下げて、検査しました。

調べたのは、汚染レベルが高そうだったり、以前、高濃度の放射能が検出されたりした農作物と海産物。肥料や土も調べました。検査は、本誌で以前紹介した仙台市の「小さき花 市民の放射能測定室」で、ゲルマニウム半導体検出器を用いて行いました。

この検査結果を基に、国のデータも参考にしながら、各食品の安全性を解説します。

栽培されているコメ・麦、野菜・果物で、普通に売られているものは、福島産でもほとんどが1ベクレル/kg以下で安全になっています。

ただし、乾燥させると、検出される数値が高くなります。

お茶

そこで、静岡茶と狭山茶を買って検査に出しました。

結果は、0.4と0.6ベクレル/kg以下で、両産地とも安全になっていました。



一番危ないシイタケ

キノコはセシウムを濃縮しやすいので、危険性が高い農産物です。

一番多く売られているのはシイタケなので、最大生産者のJA甘楽富岡(群馬県)のを検査。結果は菌床栽培が3.4ベクレル/kg、原木栽培が16ベクレル/kgでした。

どちらも食べると健康に被害が出るレベルです。



国の検査データを見ると、50ベクレル/kg以上のシイタケがたくさんあります。

千葉県ですら、原木シイタケに出荷制限をかけている地域があり、15ベクレル/kg以上検出されることがあります。

シイタケはとても身近な食材なので、一番気を付けなければなりません。

シイタケ栽培に使う原木や菌床の材料を、福島放射能に汚染されていない九州あたりのものにすれば、すぐに1ベクレル/kg以下になるので、生産者は早急に対処してほしいものです。

マイタケ

マイタケは「雪国まいたけ」を検査。

結果は「不検出」で0.5ベクレル/kg以下でした。

ただし、国の検査では10ベクレル/kgを超えるマイタケがいくつもあるので、どれも安心というわけではありません。

食べるなら、このブランドを選びましょう。

ブナシメジ

ブナシメジはイオントップバリューを検査し、「不検出」。

0.2ベクレル/kg以下なので安全です。

国の検査データを見ても、この数年、ブナシメジからはまったく検出されていません。ブナシメジは、野生のものでなければ、どれを食べても大丈夫です。

シメジ

シメジは、国の検査データを見ると、2つ10ベクレル/kgを超えたものがありました。ほとんどは1ベクレル/kg以下ですが、安全を軽視した生産者がいるので、ブナシメジより安全性が少し低いといえます。

マッシュルーム

マッシュルームも、国の検査で最近はまだ検出されていませんから、お勧めのキノコ類です。

煮干し

ミネラル豊富な煮干しは、本誌でもできるだけ食べるようお勧めしているので、検査してみました。

一番危なそうな千葉産のカタクチイワシを取り寄せて検査すると「不検出」。0.5ベクレル/kg以下なので安全です。

国の検査でも、すべて1ベクレル/kg以下ですから、他の産地の煮干しも放射能の不安はありません。

イワシの丸干し

イワシの丸干しも千葉産を検査。これも「不検出」で0.3ベクレル/kg以下なので、安全です。

国が検査したイワシのデータを見ると、すべて1ベクレル/kg以下ですから、イワシは安心して食べられます。

シラス

シラスは、原発事故直後には高い値が出ていました。2013年からはまったく検出されていないので、シラスも安心して食べられます。

スズキ

汚染度が高いとされるスズキの検査データを見ると、この1年以内に80ベクレル/kgを超えるものがありました。平均値も高いので、やはりスズキを食べてはいけません。

カツオ・マグロ・サケ

カツオの検査データをみると、この3年間、1ベクレル/kgを超えたことはありません。

マグロ、サケも同じで、安全です。

ワカメ

ワカメはイオントップバリューの三陸産を検査すると「不検出」。0.4ベクレル/kg以下なので、安全です。

海藻類は、もうセシウム137が検出されなくなっているので、安心して食べられます。

アサリ・シジミ

アサリもシジミも、国の検査データを見ると、まったく検出されなくなっていました。安全になっているので安心して食べましょう。

淡水魚

淡水魚は、福島産はもちろんダメ。関東から青森まで、どの県でも安心できない魚種があります。

コイは、群馬産でも1ベクレル/kgを超えることがあります。それでも3ベクレル/kg以下なので、身を食べていけば危険ではないと思います。

マスは、1ベクレル/kgを超えないので、安全です。

レンコン

茨城産のレンコンを検査すると、1.9ベクレル/kg検出されました。

水煮レンコンは最初から栄養が抜けているのでダメですが、調理して食べる国産のレンコンは、放射能が少し心配です。



肥料

肥料は、原料が関東産と思われるものを、4つ検査。

有機配合肥料と魚粉とは不検出でしたが、「草木灰」から9ベクレル/kg、「サラダ野菜の土」から17ベクレル/kg検出されました。



関東産の肥料には不安があります。

家庭菜園をされている方は、中国・四国・九州産の肥料を、ネットで取り寄せて使いましょう。



高濃度汚染!

山菜、野生キノコ



福島原発事故を熱心に追いかけて、他のメディアを引き離して報道する東京新聞。昨年の記事によると、福島から離れた群馬県や長野県でも汚染が見られました。放射能汚染の現状を報告します。

直売所で基準値超えの山菜

昨年前半、東北6県に群馬県と長野県を加えた8県の、計50カ所の直売所と道の駅で売られている山菜を対象に、放射能調査が行われました。

調査したのはNPO法人「ふくしま30年プロジェクト（以下、30プロ）」と独協医科大学の木村真三准教授。

計111点を調べたところ、仙台市の直売所で販売されていた、秋田県産と表示されたコシアブラと群馬県産のコシアブラとワラビから、基準値の100ベクレル(Bq) / kgを超える放射性セシウムが検出されました。

検査結果を知らされた群馬県は、出荷が制限されているコシアブラを売らないよう、出荷者に指導しました。

また、ワラビは、検査した上で販売するよう、出荷者に要請。出荷した同県長野原町

の男性は「まさか基準値を超えるなんて思わないから検査せずに出荷した。原発からこんなに遠いのに、しかも9年も前の事故の影響が今も残っているなんて」と、驚いていたそうです。

ネット通販からも

新型コロナウイルス感染拡大の影響で利用者が急増しているネット通販サイトでも、基準値超えの食品が多数売られていることがわかりました。

30プロが個人売買サイトの「メルカリ」と「ヤフオク!」、大手通販サイトの「楽天市場」で、福島県を除く東北5県と9道県の22人(店)からコシアブラを購入し調べたところ、山形県産の4点から109~163Bq/kg、群馬県と表示があるものから390Bq/kg、長野県産と表示されたものから101Bq/kgの放射性セシウムが検出されました(表を参照)。

放射性セシウム濃度が基準値(100Bq / kg)を超えた山菜

品目	コシアブラ	ワラビ	コシアブラ(4点)	コシアブラ	コシアブラ
濃度(Bq/Kg)	199	156	109~163	390	101
産地	群馬県産		山形県産	群馬県産	長野県産
入手経路	直売所・道の駅		ネット通販		
検出日	20/4~	20/4~	不明	20/6	
測定者	ふくしま30年プロジェクト・木村准教授		ふくしま30年プロジェクト		

(東京新聞より)

各自治体は出品者に、出荷制限されている区域で採った山菜を売らないよう指導し、また、検査してからの出品を要請しました。

野生キノコも危ない

野生のキノコも、基準値を超えるものが出回っています。

昨年9~10月、30プロは先述のネット通販3サイトで関東甲信、東北地方から出品された野生キノコを購入し検査しました。

すると、10月30日までに測り終えた64検体中、20品目が基準値超え。宮城県気仙沼市から発送されたコウタケが1830Bq/kg、群馬県みなかみ町のウラベニホテイシメジが486Bq/kg、茨城県常陸太田市のコウタケ、アマタケ、サクラシメジが509~135Bq/kgとなるなど、いずれも非常に高濃度です。

群馬県北部に住む65歳の男性は新型コロナウイルスの影響で本業の飲食店を春からずっと閉じざるを得ず、自分で採ったコウタケをネットで販売していました。

30プロと木村准教授の調査で、売っていたコウタケから205Bq/kgの放射能が検出されたことを知った男性は「野生キノコの販売をやめて日雇いで稼ごよ」とうなだれたそうです。男性は地元の野生キノコに出荷制限がかかっていることを知りませんでした。

放射性セシウム濃度が基準値(100Bq / kg)を超えた野生キノコ

品目	コウタケ	ウラベニホテイシメジ	コウタケ、アマタケ、サクラシメジ	コウタケ	コウタケ(乾燥)
濃度(Bq/Kg)	1830	486	509~135	3700	13000
産地	宮城県気仙沼市(発送地)	群馬県みなかみ町	茨城県常陸太田市	宮城県	宮城県
入手経路	ネット通販			ネット通販	
検出日	20/9~10			20/10	
測定者	ふくしま30年プロジェクト			鎌田准教授	

(東京新聞より)

シェフチェンコさんからのメッセージ

連帯して命を守ろう

原爆と原発事故で大被害を受けた4自治体の長にインタビューした唯一のジャーナリスト、セルゲイ・シェフチェンコさんから3.11と4.26に向けてメッセージが届きました。



連帯して命を守ろう

2つの悲劇の記念日が近づいています。

2021年3月11日は日本の福島第一原発、4月26日はウクライナのチェルノブイリ原発で世界最大の爆発事故が発生して、10年と35年です。

1986年に、ソ連の共和国だったウクライナの首都キエフから100 km離れた場所で原発が爆発したときは、不安から始まり、悲しい出来事が次々に起こりました。

10年前は、日本で東北地方太平洋沖地震によって破滅的な津波が発生し、原発が爆発して世界は再び原発事故の恐怖を経験しました。

私は、ウクライナの同胞や、日本の人々を取材しただけでなく、爆発事故が起きた市と町の指導者も取材しました。

ご支援・協力に感謝します

このメッセージの前に、『食品と暮らしの安全基金』のみな様には、ウクライナのチェルノブイリ被害者の権利を擁護する団体を支援していただき、また『ジャーナリスト・イニシアティブ基金』や『ウクライナ・ジャーナリスト連盟』とのパートナーシップにも深く感謝しています」とお礼が書かれていました。

また、平和な時代になる前の第2次世界大戦中に、広島と長崎へ原爆が投下された歴史を、みんなが知っています。灰で幽霊のようになった廃墟を生き延びた人々は、近代都市を造り上げました。私は、原爆が投下された場所を訪れた後、市を率いる2人の市長にも取材しました。

チェルノブイリやプリピャチ市では、放射能で汚染された空気を吸って命を奪われた人がたくさんいます。私の家族、親戚、友人にも亡くなった人がいます。

双葉、広島、長崎で、日の丸の旗とともに慰霊碑に飾られた折り鶴を見て、科学技術の両刃の剣がどれほど危険なものであるかが心にしみました。

両刃の剣になる科学技術を安全に使用する能力を、私たちはまだ持っていないのです。

私たちは、壊れやすい地球の自然に責任を持ち、将来の世代の生命と健康を守るよう、神から使命を与えられています。



争うより「悪い平和」を

原子力災害に関して私が見聞きしたことから導き出した結論は簡潔にして単純です。科学技術の進歩が避けられない一方で、間違いも避けられません。それが時に、取り返しのつかないことになります。そうならないように科学技術を用いる責任を、私たちは負っているのです。

それほど遠くない冷戦の日々と、敵対的な2つのグローバルシステム間の軍拡競争を、私は思い出します。

平和活動家の「明日の放射能より、今日の行動を」と言う言葉を聞いたのは、そのころでした。

核の時代には、争うよりも「悪い平和」の方が優れています。良いことを求めて争うより、人命を最優先にして、問題はあっても平和にやっていくほうがいいのです。



連帯して命を守る

コロナウイルスによるパンデミックの時期ですから、日本国民に向けて、私は、まず友人の発言をお伝えします。

1986年にチェルノブイリ市を訪れ、原発事故取材したキエフのジャーナリスト、ミハイル・ソロカ氏は「新しい災害を引き起こしている新型コロナウイルスは、放射線と同じくらい目に見えず、陰湿で、健康や生命にとって危険なものです」と話しています。

世界の片隅で起きた災害は、あっという間に地球規模の災害となり、多くの人に苦しみと苦難をもたらしました。この事実が、今日の世界がいかに脆弱であるかを物語っています。

チェルノブイリと福島の原発事故を乗り越えようとするのは、無関心だった人々を結びつけ、民族間の相互理解を深め、両国の関係をより良いものにしてきました。

現在のパンデミックでも、私たちは連帯して、地球と人間の生命を守ることが求められています。

(ウクライナ・ジャーナリスト連盟・書記長)



国際チェルノブイリ福島連盟

ヴァシーリー・マカレンコ会長からのメッセージ

私たちは、チェルノブイリや福島の大惨劇に胸を痛めている者として、世界が過去の教訓を学び、再度、原子力災害が起こらないようにしてほしいと願っています。

小若副会長が率先して行うプロジェクトのすべてを支持し、共に行動し、放射能汚染地の人の罹患率などを分析する準備もできています。このプロジェクトの成果を、国連をはじめ、世界各国にアピールしていきましょう。



ヴァシーリー・マカレンコ会長

元ウクライナテレビ記者。事故後、チェルノブイリ原発を真上から撮影したスクープ映像は、今でも世界中のニュース、ドキュメンタリー番組に使われている。

ウクライナ・チェルノブイリ連盟 副会長を経て、2017年に国際チェルノブイリ連盟会長に就任した。



20カ国の団体が加盟する放射能被害の救済団体

チェルノブイリ原発事故の処理で、70万人といわれるリクビダートル（原発事故処理の労働者）は甚大な健康被害を受け、チェルノブイリ周辺の住民も、様々な病気に苦しんだ。

健康被害を受けた人たちを救うための団体が最初にチェルノブイリ発電所で発足すると、旧ソ連の各地に広がり、1989年に、「全チェルノブイリ連盟」が結成された。

健康被害救済活動を続けるなかで、新たな法律の必要性を痛感。政治家とともに成立にこぎつけたのが、歴史的な「チェルノブイリ法」である。

ソ連崩壊後は、再編成された各国団体によって、連絡組織として「国際チェルノブイリ連盟」が結成された。「食品と暮らしの安全基金」小若順一が加盟すると、2019年5月の第7回総会で、「国際チェルノブイリ福島連盟」に改称され、小若は副会長の1人に選ばれた。

総会員数は100万人を超え、家族を含めると320万人となる。

NPO 法人 食品と暮らしの安全基金（日本子孫基金：JOF）

〒338-0003 埼玉県さいたま市中央区本町東 2-14-18

☎ 048-851-1212 FAX：048-851-1214

メール：mail@tabemono.info

ホームページ：http://tabemono.info

頒価：600円（税・送料込）

2021年3月1日発行